

花と食事

由布聡太郎

平熱三十六度八分の日を歩く

朝は、夜が蒸発した匂いがする

冷えた炭酸の一粒と似ている

朝食は鼻にねっとり絡みつくから食べない

家を出て生活をして、帰路につくと、喉の裏に機械油の溶けた匂いがこびりついて、

簡単な食事を作って、食べて、身体の汚れを落として、

冷えた毛布を着て、なるべく衣擦れの音が出ないように眠る

夢を見た、小さな惑星で水色とピンクが混ざりあった

沈む前の金星を見つけて

わたしは月を呑み込む

月に行こうと思ったのだけれど

「燃えてしまうよ」と魔法使いに言われたから

蠟燭を灯して、一息に消した

祝祭はあと何度訪れる、と

これだけでいいと思える日の幸福は

無効になる

向こう……

になる

の？

魔法の使い方は「知られないこと」、それだけ

アスファルトの街で育ったって土に還るように
影が濃くなると海を見たいと思うように

それは、何も求めず、知られないこと

本当は、花を買う人は花瓶を、食事をする人は食器を愛していた
花はどれだけ愛でもわたしにならずに壊れていつて

食事は白歯で壊すたびにわたしになっていつた

割れた電球で食卓を灯す

祝福のためのケーキがそつと佇んでいる

溶けた生クリームが手について、甘ったるいべたつきが取れなくなる
蠟燭を吹き消すと、ケーキは壊れて祝福はわたしになっていく

一つ種明かしをすると、そのケーキは今日になって焦って探してやっと見つ
けたこと

平熱三十六度八分の日、

彼女が魔法を使って、誰かが笑う

雪の下から覗く花に似た、小さな約束を抱いて、いて

（永方佑樹「祝奏の現在形」に寄せて）